

教育の原点は、教えるのではなく、共に育み合う関係

知的障害児教育の歴史は、「滝乃川学園（明治24年石井亮一：創設）」に辿り着く。

学園名が記憶にあり、TV番組紹介でその名が目にとまり、「その時歴史が動いた『母の灯火・小さき者を照らしてー石井筆子・知的障害児教育の道ー』」を見て、もっと知りたくネットで調べた。

筆子は長崎：大村藩士の娘として生まれ、父、叔父（鞍馬天狗のモデル？）は、幕末～明治維新の志士で、明治政府でも要職に就いたこともあり、筆子は「鹿鳴館の花」と云われるような生活だったよう。

女学校卒業後、日本初の女子海外留学生としてフランス等に留学。

帰国後、華族女学校に赴任し、後の貞明皇后たちを教え、後に校長となり、この学校は留学生仲間の津田梅子の女子英学塾（現：津田塾大学）に引き継がれた。

（余談だが、万博のために岩倉具視に随行・渡米の経験もある才女だったよう。）

この間、子女の人権確立を目指して教育に精力を傾け、大日本婦人教育会の設立にも尽力。また、結婚するも、長女は知的障害児、病弱な次女（1歳）・三女（6歳）を亡くし、間もなく夫（35歳）も亡くし、31歳の時に婚家から離縁させられる。

娘と出入りしていた滝乃川学園創設間もない石井亮一の人間性に惹かれ再婚し、知的障害児・者の保護、教育、自立に献身する生涯を送ったよう。

また、付設の保母養成部の教師としても子女の教育に携わった。

結婚の時に両親から贈られた「天使のピアノ」は、国産第一号のピアノでないかと云われ、学園に現存している。

当時の富国強兵の世情は、子女の社会的地位は低く、まして知的障害児・者への理解がない中で、度重なる苦難であったであろうことは、想像にかたくない。

その苦難の連続の中で学園を発展・継続させた今日的意味は、「人間社会は、人間一人一人が、その弱さを断ち切り、良心に従って、勇気をもって発言しない限り、決して良くはならない。（石岡繁雄）」ということ、筆子（享年82歳）の波乱の生きよう（様）で語りかけてくる実践例であると思う。

最近の青少年の虐待、いじめ、非行問題等に接するにつけ、筆子の教育実践は、今日的にも育児、教育に大いなる示唆を発信しているように思う。

それ故か、筆子の生涯は、最近、映画化もされているようである。

機会があれば、ぜひ映画を観賞したい。

（2006年12月21日 記）